

かわだんぎ 川談義(10)

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会

第10号

令和7年3月

「明治43年(1910)の大洪水」

軍司俊道

(北上川流域連携交流会 理事長)

知勇氏は奇しくもこの年に若山牧水の「創作」に参加しており、これらの句を歌集にしたためたものと思います。

災害が頻発していますが、互いに助け合いながら過していけたらと祈る昨今です。

盛岡市史の洪水の記録を調べると、明治時代には約20回ほど洪水にみまわれ、特に明治43年9月3日の洪水の記述が目飛び込んできた。この年は8月にも洪水被害を受けていた。この時は、全市中浸水をまぬがれたのは六日町(むいかちょう)だけという未曾有の大洪水であった。

中津川での出水は、午前二時には約1.8mに達し、五時には約2.4m以上となり、よの字・毘沙門の両橋が落ち、七時には下の橋流失、その後流下してきた家屋や木材で明治橋・上の橋も流失、午後二時には中の橋もついに落橋したため交通は全く途絶し、市は三分せられたと・・・。

この時の様子は新聞にも詳しく取り上げられています。(明治期における盛岡市の災害を参照)。さらに菊池知勇全歌集を調べていたところ、その時の様子を短歌にしたものが見つかりました。菊池知勇氏は東磐井郡渋民村(現・一関市大東町)出身で、岩手師範(現・岩大教育学部)を明治43年に卒業、盛岡市城南小学校で訓導(教員)をしていた時にこの洪水に遭遇したそうです。その時の洪水の状況を短歌に詠んでいます。

「中津川大洪水」より

夢のうち警鐘(かね)は聞きしが眠さむればわれらが宿は濁流のなか
濁流は庭木のあひを流れをりそをば見詰めて吾は動かず
いまたとて寐起きの浴衣の袖まり學校目ざして濁流蹴立つ
校舎膝を没する激流を横ぎるとして足ふまへつつ
濁流のまつた中の職員室柱時計の音さやかなり
刻刻の浸水状況をわが記す濁水うづま(く)上の黒板
上の橋與の字橋皆落ちたらし流材支ふる中の橋見ゆ
中の橋すわ落ちたるぞ橋々の流材と共にはや眼の前に
橋々の流材觸れて毘沙門橋さらに下の橋渦巻き流る
橋々の梁木流れゆ(く)ところ土煙あげて下の橋校消ゆ
窓の前の土手の松並木次次に濁流に吞まれ流れゆ(く)はや
塀は流れ物置が流れ濁流にわが校舎さしむならずや
濁流にゆらく校舎を連れ出づ救援の綱に生命託して
濁流を連れはしたれ冷え果てし足は歩まず土を踏めども
来て見れば山なす泥土に埋もれて流れ残り教室があり

洪水の緊迫した様子が刻々と詠われております。現在ではこのような被害状況を短歌に詠むことはないと思いますが、菊池